

原案と下越え案の比較

	橋梁案	下越え案
環境への影響 (振動地盤沈下含む)	<p>(騒音・振動) 橋梁部は、延長床板、ジョイントレス化等による発生源対策と、高機能舗装、遮音壁、ルーバー、環境施設帯等による発生源対策により影響を低減。</p> <p>(地盤沈下) 補助工法の採用、計測施工等により、管理値内に影響を低減。</p> <p>(大気) 緑化・環境施設帯、更なる対策等により影響を低減。 換気量の地域間バランスが保たれており、影響は均衡。</p> <p>(自然環境) ひょうたん池等の消失・改変等が生じるが、既に、代替環境を創造しており、影響を低減。 効率的な換気計画が可能のためエネルギー消費量は小。</p> <p>(住環境) 低土被り区間における上部空間の活用により住環境を創造。 明かり部には緊急進入路の可能性もあり、地域防災が向上。</p>	<p>(騒音・振動) 全線トンネル構造のため影響は僅少。</p> <p>(地盤沈下) 補助工法の採用、計測施工等により、管理値内に影響を低減。</p> <p>(大気) 全線トンネル構造のため当該地区への影響は僅少。 一方、縦断勾配が大きくなるため、全線の排出ガス量は増加。 換気量の地域間バランスが保たれず、影響は不均衡。 影響を均衡にするためには、新たな換気所が必要。</p> <p>(自然環境) ルーブリンプやランプ部のスライスカット等により、新たな自然環境の改変が生じるため、影響は増加。 縦断勾配が大きくなること、トンネル延長が伸びることから、換気設備の増強が必要でありエネルギー消費量は大。</p> <p>(住環境) 現状を維持。</p>
工事の影響 (周辺住民への影響)	開削箇所は、地上部からの施工となるため、騒音等、工事による影響が生じる。しかし、防音シェルターや覆工板、新技術・新工法の採用により影響の低減を検討。	全線トンネル構造のため影響は僅少。
工期・工費	現状を維持。	トンネル延長の増加、換気設備の追加、新たな支障物件の移設等により影響は大。
利用者への影響	現状を維持。なお、縦断勾配の緩和により、走行環境の向上も図れるが、地上部が増加し地域分断が生じてしまう。	幾何構造(縦断線形・横断線形)が厳しくなるため、走行環境(走行性・快適性・燃費等)は低下し、事故・渋滞リスクは増加。